

景観計画における地域像の明確化と地域間連携のあり方に関する考察

ー岐阜県恵那市岩村町における景観まちづくりワークショップの取り組みからー

発表者：山口敬太、出村嘉史、田中倫希

❖ 研究の背景・目的

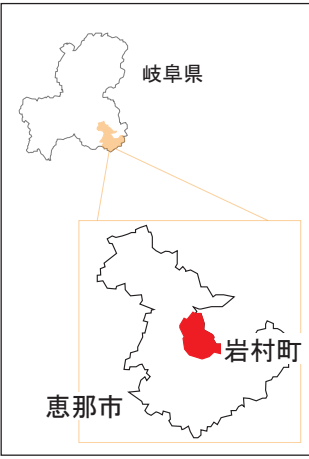
岐阜県恵那市では、平成 16 年に旧市内 8 地区と周辺 5 地区が合併し、13 地区で構成される新恵那市として生まれ変わった。これに伴い、平成 20 年より市域全体を対象として新市内の各地区の自立と連携を主眼に据えた「恵那市景観計画」と、各地区固有の地域資源を活かした地域的自立と連携を促すとの基本目標があることをふまえた「地域別景観計画」を策定することになった（平成 22 年度策定完了予定）。

この地域別景観計画は、各市区の地域特性に留意することはもとより、複数の地区を貫く水系や道路や鉄道を活かした計画内容とすることで、隣接地区が相互に魅力ある風景としてつながり合うという地域連携型の景観計画を目指している点に特徴を持つ。

策定にあたり各地区においては、様々な立場の参画者が共通の論点で協議をすすめていくことのできる景観まちづくりワークショップを展開した。住民らの地域づくりの将来目標の明確化や、地域間連携のあり方を考えるにあたり、このワークショップが果たした効果は大きいと考える。こうした観点から本稿では、筆者らが参画した岩村町、主に富田における景観まちづくりワークショップの取り組みの過程とその際の工夫、得られた成果について論考する。

❖ 対象地概要

岐阜県恵那市岩村町は、岐阜県の南東部に位置する人口 5467 人（H22 年 5 月 1 日現在）、地区面積 34.36k m² の町である。約 800 余年の永い歴史を秘めた岩村町には重要伝統的建造物群保存地区に指定される城下町としての歴史的な町並みや旧跡が保存されている岩村城下地区と、農村景観日本一の田園風景など町を取り巻く里山の自然と歴史に裏づけされた文化のまち岩村富田地区がある。交通に関しては、町の中央部を南北に国道 257 号、東西に国道 363 号と明知鉄道が走り、山岡や明智との動線を形成している。このように多くの優良な観光資源を有する岩村町は、それらをどのように地域活性化に結び付け、自立と地域間連携を進めるかが今後の課題である。



❖ 第一回WSの成果

第一回・第二回WSの成果として、住民の方が考える富田の大切な風景とは、昔ながらの農村、祭など伝統行事、歴史的な史跡、川や里山などの豊かな自然風景であることがわかった。

住民の方のご意見

「田がただ存在するだけではなく、きちんと手入れされた水田として残していきたい。」

「初めは富田にあった城下町が現在の城下に移動したため、今でも物の売買等、深いつながりがある。城下と富田を『岩村町』として一体的な認識を持続けたい。」

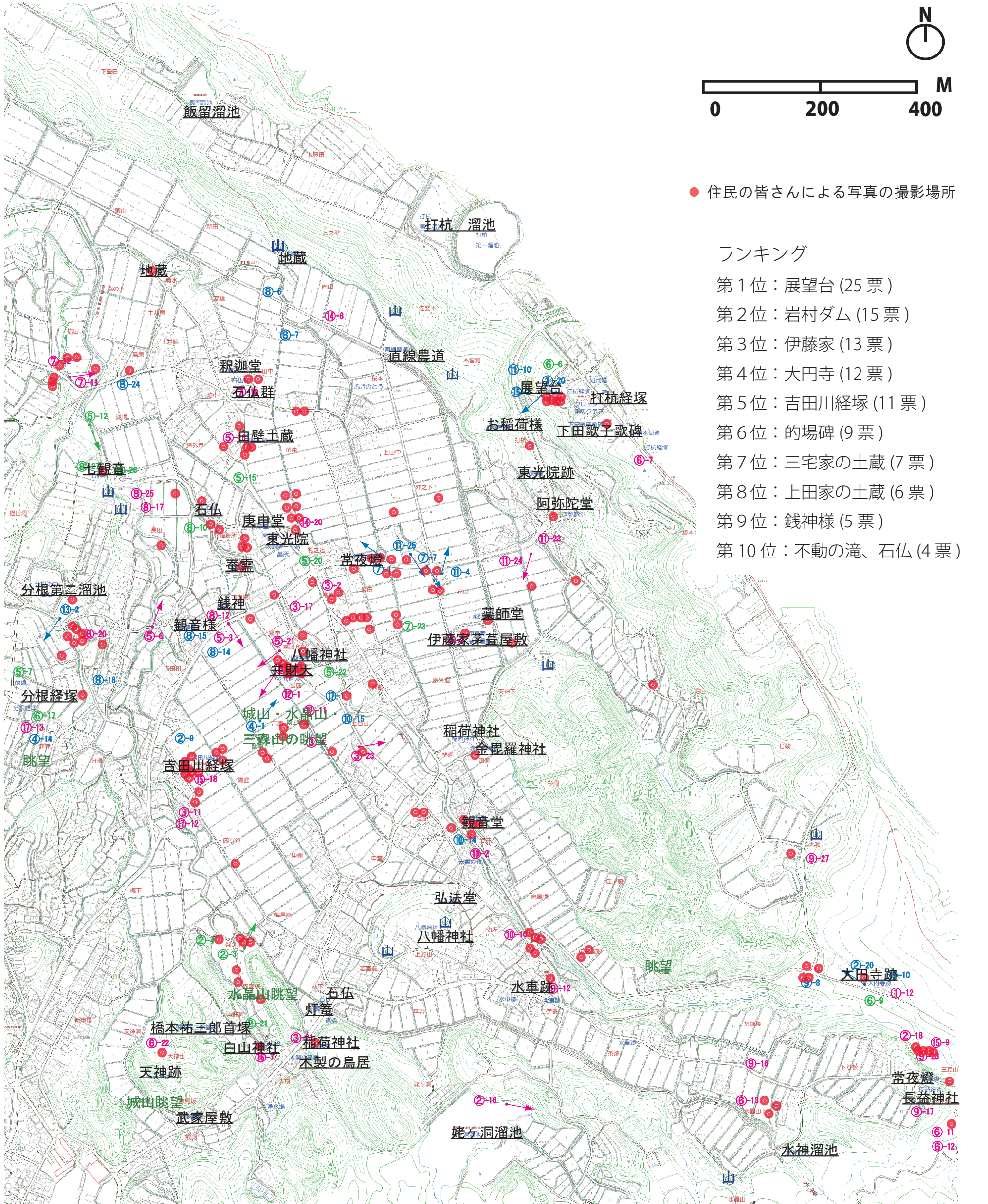
「子供をきっかけに地域のつながりが強くなるので、地域のためにも、子供集まる場所を残していきたい。」

「山に囲まれ、広々とした田の中に川が通っているこの自然が富田らしさだ。」

「三森山は、農地からの眺め、頂上の展望台からの眺めともに自慢できるものだと思う。」

また、第一回WSの宿題で住民の方が景観資源と捉えた写真撮影箇所をプロットすることで景観資源図を作成し、それらの写真を第二回WSで披露し、好きな写真を投票してもらうことによりランキングが明らかになった。また、「富田の好きな風景」や「気になる風景」を話し合ったことより、マップ上に記された景観資源、及びその地域の雰囲気支える要素が明らかになった。その写真を収集することで景観資源写真集を作成した。

❖ 富田の景観資源 図



● 住民の皆さんによる写真の撮影場所

ランキング

- 第1位：展望台 (25 票)
- 第2位：岩村ダム (15 票)
- 第3位：伊藤家 (13 票)
- 第4位：大円寺 (12 票)
- 第5位：吉田川経塚 (11 票)
- 第6位：的場碑 (9 票)
- 第7位：三宅家の土蔵 (7 票)
- 第8位：上田家の土蔵 (6 票)
- 第9位：銭神様 (5 票)
- 第10位：不動の滝、石仏 (4 票)

❖ WSの概要

景観資源の抽出及び風景の共有、景観資源の確認及び評価コミュニティ領域の確認、地域の将来像のイメージ及びそのイメージ実現のための持続可能な村づくりプランを考えることを目的として、計3回のWSを行った。

	開催概要	目的	内容
第一回	2009 年 10 月 17 日 13:30 ～ 16:30 富田会館	・ 富田の風景の再発見 ・ 風景に対する意識の把握	・ 富田のまち歩きをしよう！ ・ 「好きな風景」「嫌いな風景」「気になる風景」を再確認し、話し合おう！

宿題 「気になる風景を写真撮影しよう」

第二回	2009 年 11 月 7 日 13:30 ～ 16:30 富田会館	・ 残していきたい風景の確認 ・ 将来像の明確化	・ みんなが撮った写真を見よう！ ・ 富田のいい場所、思い出の場所を話し合おう！ ・ 富田にとって大事なものをこうあってほしい姿について話し合おう！
-----	--	-----------------------------	--

宿題 「富田のあるべき姿の作文を書こう」

第三回	2009 年 12 月 6 日 13:30 ～ 17:00 富田会館	・ 長期的な地域づくり方針の提案 ・ 実現のためのアクションプランの提案	・ これからの村づくりのコンセプトを考えよう！ ・ 富田地域絵図を確認しよう！ ・ 目標を実現するために、自分達ができることを考えよう！
-----	--	---	--

第四回 2010 年 2 月 20 日 富田景観まちづくり計画の素案報告と修正
2010 年 5 月 30 日 恵南四地区（岩村富田、城下、山岡、明智）合同 報告会

❖ 富田の景観資源 写真

（1） 大事な風景

①全体を見渡せる眺め



岩村茶寮からの富田



分根の場より見渡す富田

住民の方のご意見

「異なる勾配の道が多く、建物など視界を遮る物がないため、田や山を広く見渡す事ができる。」

「町全体を見渡せる眺望を大切にしたい。」

②農村の風景



手入れされた「ぼた」



美しい「堇」に

「棚田の光景が素晴らしく、誇りに思う。」

「ぼたは、各持ち主が刈り込むので、刈り込み方にその人の性格が表れていて面白い。」

③水辺の風景



遊び場となる富田川



手作りの木橋

「子供の頃はよく川辺で水遊びをして遊んでいた。堰で作った小規模のプールのようなものがあった。」
「田畑は川を中心に存在するので、富田にとって川は大切な資源である。」

④集落の風景



伊藤家の茅葺屋敷



三宅家の土蔵

「茅葺の家や土蔵など、古くから残る個人のものも、保存していきたい。」

「かつては、ほとんどが田の字造りの家であった。今でも残っている家の屋根の見栄えが良い。」

⑤歴史・史跡の風景



遊び場でもあった経塚



祭りの中心の八幡神社

「古い史跡により、昔の生活がしのばれる。」

「神社では各地区が催すお祭りが開かれるため、様々な世代が集まる場所となっている。」

（2） 要改善の風景



手入れされずに荒れた川



放置されたサイロ

「蛭は残っているものの、かつては見られた魚がいなくなってしまった。子供たちが遊べるような川を取り戻したい。」

「放置されているゴミは何とかしないとイケない。」

❖大目標

第二回、及び第三回の議論を整理することにより、以下の三つの村づくりの大目標、まちづくりの合言葉を設定した。これらを整理すると、協力体制・持続的な農業・美しい風景・人々の交流、の項目が共通しており、互いに補完し合う目標となっていることが分かる。

＊地域内の助け合い、協力の体制を維持・構築し、
持続的な農業と美しい景観づくりをめざす

＊美しい風景の中で歩き、休息し、
地域の人々が交流しあえる村づくりをめざす

＊風景資産、豊かな食文化、年中行事などを軸に地域交流を推進し、
農産物のブランド化と販売促進による地域の自立をめざす



❖小目標・アクションプラン

大目標を達成するための、1空間2生業3文化の三つの視点から小目標を設定し、それらに対応するアクションプランを整理した。整理することで、より具体的な、空間・生業・文化のアクションプランを見出した。

（１）空間

- ① 今ある昔ながらの故郷の景観を残す
 - ・田の字造りの家屋を守る・高い建物や奇抜な色の建物を建てないようにする
- ② 手が行き届いた農村景観を残す
 - ・ぼた、共同市道、耕作放棄地、神社、祠の手入れ・風景カタログの作成・庭や花の手入れ等、景観作りへの貢献の表彰
- ③ 外からのまなざしを意識する
 - ・眺めのいい場所の景観の整備と保全管理の充実・休息場所の手入れ・駐車場、視点場の配置計画・トイレの設置
- ④ 四季の移ろいを感じられる景観づくり
 - ・個としての桜、群としての山桜を守る

（２）生業

- ① 農の営みを継承する
 - ・営農組合などと連携し、荒地をつくらない（荒地を見つけ、農地に戻す）土地の管理の仕組みづくり
- ② 今後も地域のつながり・助け合いを大切に
 - ・他地域と連携した地産地消の推進
- ③ 次世代の人材を育成する
 - ・子供たちへの歴史・文化・農業の伝承
 - ・親子で、子供が参加できるイベントの企画
 - ・学校行事イベント・祭りの組み込み
 - ・農業後継者サポート
- ④ 交流を軸として農村生活と観光を結びつける
 - ・持続的な農業体制の構築
 - ・農作業・イベントボランティアの参加呼びかけ

❖より具体的なアクションプラン

○地域ブランド化による農業促進

- ・美しい風景と抱き合わせでの農業販売の促進（手入れの行き届いた農地の米をアピールする、販売品に農村景観日本一ラベルを張る、など）
- ・里山を活かした旬のもの（きのこなど）や気候を活かした作物、漬物などの販売促進
- ・収穫祭などの米と祭りと販売を結び付けたイベントの開催（恵那市の特産物との連携で「おいしい米を食べよう」イベント）

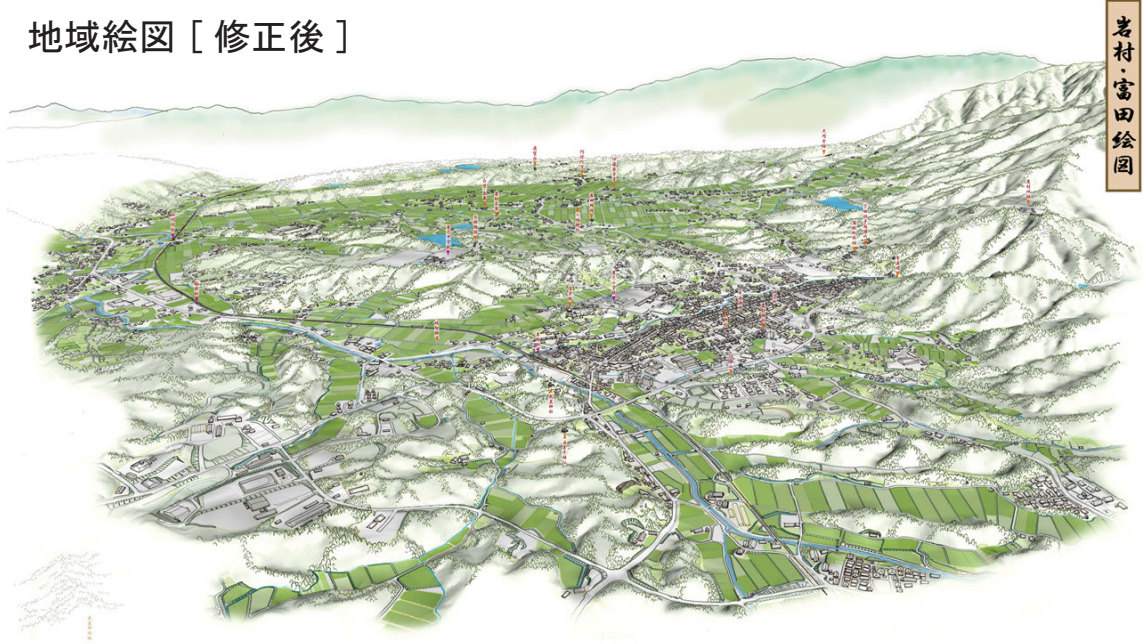
○回遊路の設定

- ・日常的な散策者、自動車での来訪者のためのモデルウォーキングルートと拠点の明確化（歴史的ストーリーのあるルート）
- ・岩村城下と空間的につながためのコミュニティバス

❖富田地域絵図

富田地域絵図には、議論での住民の意見を参考に、景観の骨格を成す地形と景観資源を表現した。景観の骨格である地形として、富田の特徴である山並みと棚田を強調して描いている。また歴史的にも観光の充実にも切り離せない城下を、城山を中心に一体的に描いた。これらの骨格の中に個々の景観資源が存在しており、地形・城下との結び付きを意識した上で、村づくりを行っていくイメージ共有を目的とした。

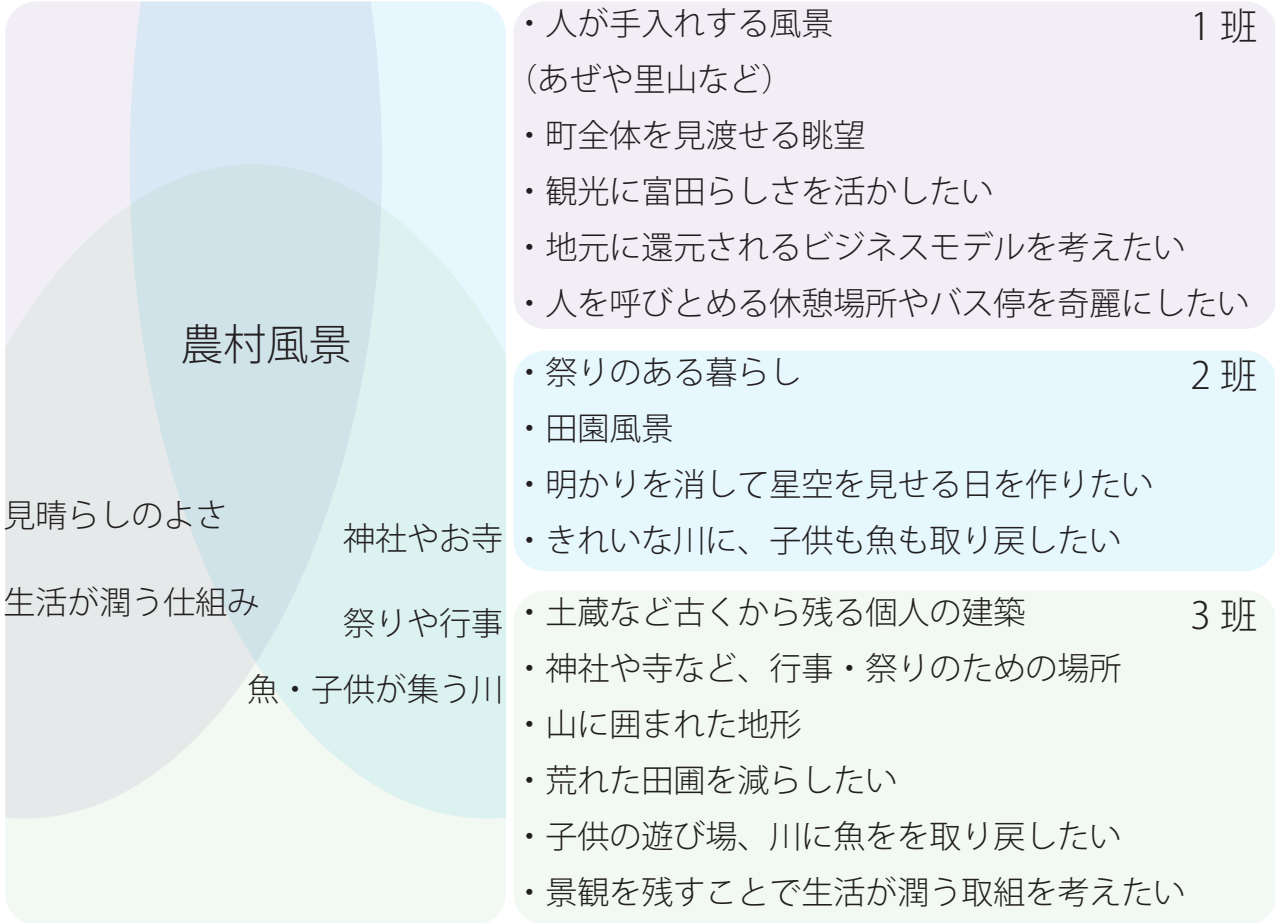
地域絵図【修正後】



❖第二回WSの成果【残していきたい風景の確認】

第二回WSでは、富田の大切なもの、富田をこうしたい、というテーマで議論した。その結果、三つの班の共通項が浮かびあがった。

●大切にしたいもの・富田をこうしたい



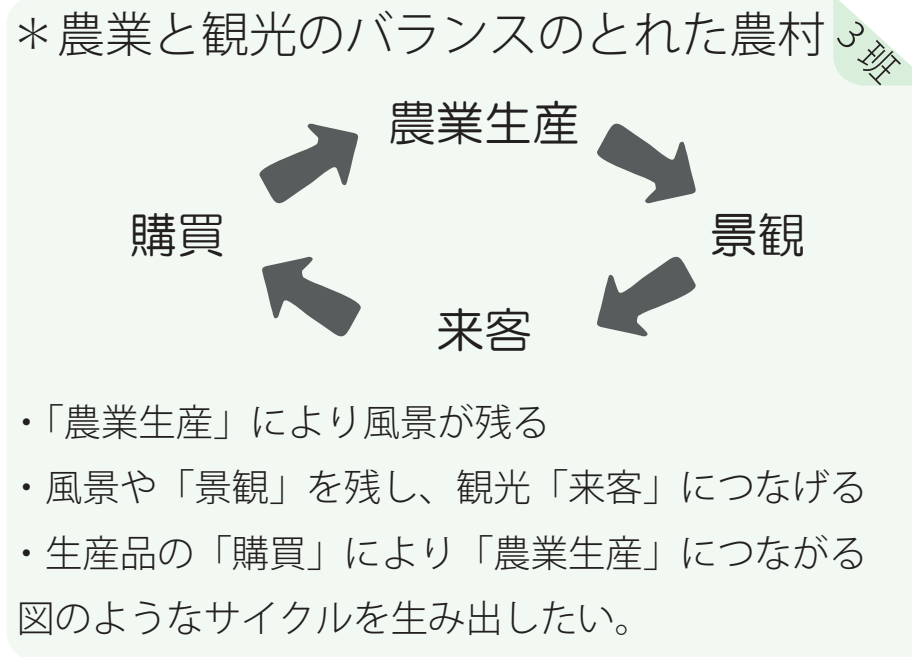
❖第三回WSの成果【長期的な目標の明確化】

第三回WSでは、村づくりのための長期目標、目標を実現するためのアクションプランについて議論した。各班の長期目標、アクションプランを元に、左の大目標及び小目標・アクションプランを設定した。

- ＊里山・棚田・水元が一体となった自然のまちな富田
- ・今のままの富田でいてほしい
 - ・里山と棚田（ボタ）の関係を大切にしたい。
 - ・富田のキーポイントである桜を枯らしたくない
 - ・田んぼや桜を大切にしなければ、10年、20年と「今のままの富田」が、続いていかないと思う
 - ・新しく入って来る人にも組み入りしてほしい
 - ・宅地開発の方も、地域と付き合いを持ちたい。組み入りすることで、お祭りを続けることもできる
 - ・田んぼを守るために、水（源）を大切にする

富田の根本にあるのはこの風景を残す事だと実感した。

- ＊農村生活日本一
- ・手入れの行き届いた村を維持したい
 - ・里山の山際や川を手入れして、山際や川縁に休息所・散策路などを設けたい。また、休耕作地を減らしたい。
 - ・富田に住んで欲しい
 - ・観光客に富田に住む、再び訪れ農作業して欲しい。
 - ・富田全体を巡って欲しい。
 - ・展望台からの眺めを景観日本一だと思っているが、富田全体で日本一の景観だと思っている。そのため、富田全体を巡ってもらいたい。

- ＊農業と観光のバランスのとれた農村
- 
- ・「農業生産」により風景が残る
 - ・風景や「景観」を残し、観光「来客」につなげる
 - ・生産品の「購買」により「農業生産」につながる
- 図のようなサイクルを生み出したい。

色々なものが関わりあって景観は維持されていく。

風景を残す事、生活していく事は切り離せない。



❖総括【WSの中で共有されていた事】

- #大切な風景を残すために「農の営み」を継承していこう！
- #水田だけでなく里山や川（水元）、農の営みと関連した「講」などの祭・年中行事は地域の大切な資源だ！
- #農の営みを続けるため、地域の自立のために、農を基本とし、すぐれた風景を活かした観光を取り入れよう！（→農産物販売・消費につなげる）



❖提案。地域の自立に向けて

現状

住民の意見を整理し、地域の自立に向けた方策を提案する。

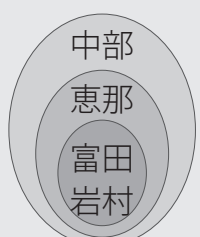
現状では、生産と購入のサイクルが富田のなかだけで完結しており、富田の魅力を活かした販売・ブランド化が行われていない。また農業従事者の高齢化が進んでいる。農業で生計が立てられる仕組みが必要である。その仕組みには、富田内を含めた『地域間交流』が鍵となると考えた。

提案 - 地域間交流による農業生活活性化

地域間交流を、交流の主体、交流の仕掛け、に分けて考える。

交流の主体として、下図の①富田、旧岩村町の人②恵那市に住む人③中部圏などの来訪者、の三グループに分けられる。各グループの滞在時間は、半日、数日間、毎週末、などを想定している。多様な滞在時間に対応できる充実したプログラムは、地域間の連携があってこそ実現できる。また交流の仕掛けとして、①場所づくり②きっかけづくり③おもてなし、が挙げられる。これらの詳細は、地域ブランド化による農業促進・農村生活文化を活かした観光促進、などに対応する。

以上の地域間交流により、農業生活が活性化される。



交流から運動へ。

農業生活の活性化により、農地の利用や文化の継承、といった効果ももたらされる。地域間運動の最終形を表したものが右のサイクルである。富田で生活を営む住民、周辺の地域に住む人、行政の協同により、地域の自立を目指したい。

